様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２４１４

研究課題名（和文）ニューカマー外国人の教育における編入様式の研究

研究課題名（英文）A study of incorporation forms of newcommer foreigners in the education

研究代表者
榎井　縁（ENOI, Yukari）

大阪大学・人間科学研究科・特任教授（常勤）

研究者番号：５０７１０２３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：全国の高校での外国人生徒の受け入れが困難な中、神奈川、大阪においてはそれぞれの文脈に基づき地域資源や教育資源を使ったシステム運用がみられた。
また大阪の外国人生徒枠をもつ高校では、外国人生徒の受け入れを可能にする文脈や教育システムと共に、受け入れ後の教育実践が、外国人教育に精通した教員たちによってなされていたことが明らかになった。卒業生のインタビューからは、高校という場で母語教育を充実させ、外国人生徒を尊重する取り組みが将来展望を持たせていることが明らかになった。しかし高校卒業以降、かれらを統合するための日本社会課題は、大学を初め多く残されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中教審はじめ、国レベルで外国人児童生徒の高校進学について着目され、その具体的政策について案中模索である中で、90年代から積極的に受け入れている大阪の公立高等学校の10年以上に及ぶ実証的研究と、その分析による課題を明らかにしたことにより、これから受け入れの枠校をつくったり体制を整えていくであろう各地の教育委員会、NPONGO.地域社会へ一定の示唆を与えることができた。卒業生の追跡調査を行うことで中長期的取り組みの必要性が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：While it is difficult to accept foreign students in high schools across the country, in Kanagawa and Osaka, it was found that the systems were operated using local resources and educational resources based on the respective contexts.
In high schools in Osaka that have quotas for foreign students, it became clear that the context and educational system that made it possible to accept foreign students, as well as the educational practices after acceptance, were conducted by teachers who were well versed in foreign education. Interviews with graduates of the high school revealed that their efforts to enhance mother tongue education and respect for foreign students in the high school setting provided them with good prospects for the future. However, many issues remain for Japanese society, including universities, to integrate them after high school graduation.

研究分野：教育社会学

キーワード：移民（外国人）の子どもの教育　進路保障、高校進学　編入様式　承認

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

グローバル化を背景とする人の移動は我が国の教育においても大きな課題である。1990 年の入管法改正施行を前後し、ニューカマー外国人が急増、その子どもたちは日本の学校で過ごすようになった。結果的に、日本の教育現場では様々な混乱が生じることになった。例えば、外国人に対する教育は法制度上の位置づけを有していないことから、外国語話者（とりわけ非英語圏）への対応も未整備であった。ニューカマー外国人の教育に対処方法をもたない学校現場は、概ね「日本人と同じように扱う」ことで対応してきたが、こうした同化主義的姿勢は、学校現場だけでなく、文科省や教育委員会等、様々アクターを巻き込みつつ論議を巻き起こしてきた。その後、ニューカマー外国人研究は日本の学校文化を相対化するような知見を導いてきたが、その研究視座が「教室」や「学校」に留まっていたことも否めない。また、ニューカマー外国人を受け入れはじめてから 25 年の時間が経過し、日本の学校を通じて社会へと接続されていったが、「その後」についての知見は十分にあるといえない。

２．研究の目的

本研究の目的は、(1)ニューカマー外国人の急増が日本の教育に与えたインパクトを跡づけるとともに、(2)日本の学校を経験した児童・生徒がどのように社会に接続されていったのかを明らかにすることである。

移民政策を有さない日本政府の取り組みは、外国人向けの教育を模索するというよりも、「日本語教育」の重視となって現れている。日本の公教育が「日本人」を対象に行うものである以上、あるいは日本語偏重の日本社会で生活していく以上、ある種のしかたなさを伴いつつ拡大する外国人教育は、日本語教育を通じた「同化」となって現れる。こうした同化論への批判は、オールドカマー外国人、すなわち在日コリアン研究において繰り返し議論されてきたことである。日本社会はグローバル化を標榜しながらも、その教育においては戦後一貫してローカルなものであり続けたのだろうか。本研究は、2 つの学術的「問い」を設定した。(1)【横糸の調査】国・県・学校レベルでの外国人教育における概況を検討する。(2)【縦糸の調査】歴史的な資料分析に加え、経年的な観点から外国人の日本社会への参入を明らかにする。

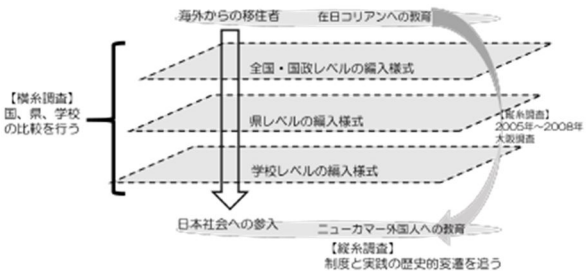
３．研究の方法

本研究では上記研究目的を明らかにするため、まずは、現在の国・県・学校レベルでの外国人教育における概況を明らかにすることとした。先駆的な外国人教育を実施する「大阪府」「神奈川県」を中心とし、全国的な外国人教育の状況を把握し、マクロレベルでの編入様式を【横糸】と捉え明らかにすることである。加えて、外国人の教育実践や地位達成を、参与観察やインタビュー調査から検討する。これを【縦糸】と捉え、マクロ・ミクロ、そして歴史的背景も踏まえて、教育における外国人の編入様式を明らかにする。

①横糸調査においては、戦後、外国人教育を学校レベルから行政レベルに至るまで牽引し続けてきた「大阪府」と「神奈川県」を取り扱う。両県ともに、オールドカマー・ニューカマ外国人が数多く定住しており、地域レベルの外国人自助組織が存在している。また、高校入試制度における「特別枠」が早期に設定されるなど、行政レベルでの支援策が講じられてきた。本研究では大阪府・神奈川県を研究対象とし、両県におけるニューカマー外国人支援制度の変遷をまとめ、全国都道府県レベルでの外国人支援制度を視野に入れ、比較・分析する。

②縦糸調査においては、日本の学校を経験した子どもがどのように社会に接続されていったのか、当初は神奈川との比較調査を予定していたが、変更し、大阪の枠校卒業生にフォーカスを当てて明らかにすることとした。2005 年‐8 年に大阪で実施した、枠校への参与調査、ならびに学校教員、外国人教員、ニューカマー生徒へのインタビューを踏まえて、大阪府の特別な支援を享受した生徒らがどのように社会に接続されていったのかを、40 件程度のインタビュー調査を行う。本調査を通じて、実態ベースからニューカマー外国人がどのように日本社会へと接続、参入していったかを明らかにする。そして最終的には【横糸】と【縦糸】を結びつけた総括的な分析を行うこととした。

研究２年目の末より COVID-19 の大きな影響を受け、現場レベル並びに比較調査の最終段階が困難なことが明らかになったため、それまでに行った調査による手持ちのデーターを中心に主に大阪の「枠校」と卒業生のインタビュー調査を丁寧に分析することにより、成果をまとめることができた。



４．研究成果

全国の高校での外国人生徒の受け入れが困難な中、神奈川、大阪においてはそれぞれの文脈に基づき地域資源や教育資源を使ったシステム運用がみられた。

また大阪の外国人生徒枠をもつ高校では、外国人生徒の受け入れを可能にする文脈や教育システムと共に、受け入れ後の教育実践が、外国人教育に精通した教員たちによってなされていたことが明らかになった。卒業生のインタビューからは、高校という場で母語教育を充実させ、外国人生徒を尊重する取り組みが将来展望を持たせていることが明らかになった。しかし高校卒業以降、かれらを統合するための日本社会課題は、大学を初め多く残されている。

（1）大阪府の特別枠校の現在的運用については、①「特別扱いする学校文化」を支えるシステムと実践が定着し②一般教員の外国人生徒への関わりが増加し③中国人生徒に焦点化していた特別枠の取り組みが多国籍化し、④ネイティブ教員の位置づけが明確化し、⑤多様なロールモデルとなる卒業生が誕生し、その交流も積極的に行われていることがわかったと同時に、⑥外国人生徒以外にも「しんどさをかかえる日本人生徒」の存在が学校内資源の分配に難しさを生じさせていること、⑦外国人生徒の多様化（中国帰国生から多エスニシティ化、国際結婚、ダイレクト入学の生徒、在留許可の違い）、⑧そしてこれらに対応する教員の多忙化と教員の世代交代が課題となっていることが明らかになった。（注１）

（2）外国人生徒を「特別扱いする学校文化」の維持継承の分析からは、①外国人を受け入れることが学校のコンテクストやシステムに根付いていることが確認され、②外国人を受け入れる「枠」の存在は重要であるが、受け入れ後の「教育実践」や外国人向けのカリキュラムが同時に行われる必要があり、③「教育実践」を担う外国人教育に精通した「教員」の重要性が浮き彫りになった。（注２）

（3）神奈川と大阪の比較調査においては、どちらも外国人生徒対象の「枠」を設定することで充実した教育実践が行われていることがわかったが、システムの運用面で違いがあった。神奈川県はNPOを中心とするネットワークによって支援を行う「ネットワーク型」で地域の状況や課題に応じた即応性や、人材の豊富さがあげられた。大阪府は学校を中心に支援が行われる「集積型」で各校に外国人教育に関わる情報が集積され、学校文化そのものが外国人教育を織り込んだものとなっていた。神奈川が日本語教育を中心として外国人生徒を日本社会へ参入しやすくすることに注力する一方、大阪では学校を基点とする母語教育の充実に大きな違いがあった。両県の違いはコンテクストや教育資源の結果生じており、今後システムを他地域でつくるときにも参考になると思われる。（注３）

（4）枠校を卒業した生徒の追跡調査からは、過半数の生徒が自身のエスニック・アイデンティティを母国と関連付けて語り、自身を外国人として自認する一方、外国人としての外国語能力や外国人性を発揮しながら、日本で新たに学び取った日本語能力や日本語への適応力を柔軟に活用していることがわかった。枠校を通じて、卒業生は日本社会を生きる外国人として育っていったが、母国と日本の両者を知る固有の能力を有した人材となっていった。（注４）

注：

（注１）2018 榎井縁、棚田洋平、林貴哉、王一瓊、石川朝子、今井貴代子、比嘉康則、山本晃輔「ニューカマー特別枠校の変容と課題―大阪府の事例から」（日本教育社会学会第 71 回大会：学会報告）

（注２）伊藤莉央、王一瓊、林貴哉、山本晃輔 2019「外国人生徒を「特別扱いする学校文化の形成に関する考察」『未来共生学』、大阪大学 pp.299-327.

（注３）2019 石川朝子、榎井縁、比嘉康則、山本晃輔「外国人生徒の進学システムに関する比較研究」（日本教育社会学会第 72 回大会：学会報告）

石川朝子、榎井縁、比嘉康則、山本晃輔 2020「外国人生徒の進学システムに関する比較研究―神奈川県と大阪府の特別枠校の分析から」『未来共創』、大阪大学 pp.275-303.

（注４）2019 林貴哉、棚田洋平、伊藤莉央、王一瓊、櫻木晴日、植田泰史、今井貴代子、榎井縁、山本晃輔「外国人生徒の高校卒業後の進路形成に関する研究―大阪府立特別枠校の卒業生インタビューより」（日本教育社会学会第 72 回大会：学会報告）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石川朝子、榎井縁、比嘉康則、山本晃輔	４．巻 第７号
２．論文標題 外国人生徒の進学システムに関する比較研究-神奈川県と大阪府の特別枠校の分析から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 未来共創	６．最初と最後の頁 275-303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50829/miraikyoso.7.0_161	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 榎井縁	４．巻 779号
２．論文標題 子どものアイデンティティ尊重を基盤に　大阪の外国人教育の現状と課題	５．発行年 2019年
３．雑誌名 部落解放	６．最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 伊藤莉央、王一瓊、林貴哉、山本晃輔	４．巻 6
２．論文標題 外国人生徒を「特別扱いする学校文化」の形成に関する考察	５．発行年 2019年
３．雑誌名 未来共生学	６．最初と最後の頁 299-327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 王一瓊	４．巻 6
２．論文標題 中国にルーツを持つ高校生と教師のコミュニケーション：教科内容に関するコミュニケーションの諸相について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 未来共生学	６．最初と最後の頁 263-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yuka Kitayama, Kiyoko Imai	4．巻 1
2．論文標題 Educational trajectories of first-generation immigrant youth in Japan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Identities, Practices and Education of Evolving Multicultural Families in Asia-Pacific	6．最初と最後の頁 68－84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 石川朝子、榎井縁、比嘉康則、山本晃輔
2．発表標題 外国人制度の進学システムに関する比較研究ー神奈川と大阪の特別枠校の分析から
3．学会等名 日本教育社会学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 林貴哉、棚田洋平、伊藤莉央、王一瓊、櫻木晴日、植田泰史、今井貴代子、榎井縁、山本晃輔
2．発表標題 外国人生徒の高校卒業後の進路形成に関する研究ー大阪府立特別枠校の卒業生インタビューより
3．学会等名 日本教育社会学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 榎井縁
2．発表標題 多文化共生社会と学校教育
3．学会等名 関西大学教育学会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 榎井縁、棚田洋平、林貴哉、王一瓊
２．発表標題 ニューカマー特別枠校の変容と課題
３．学会等名 日本教育社会学会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	棚田　洋平 (TANADA Yohei) (00639966)	一般社団法人部落解放・人権研究所（調査・研究部）・企画・研究部・研究員 (84426)	
研究分担者	山本　晃輔 (YAMAMOTO Kosuke) (30710222)	関西国際大学・社会学部・講師 (34526)	
研究分担者	今井　貴代子 (IMAI Kiyoko) (90710236)	大阪大学・人間科学研究科・招へい研究員 (14401)	
研究分担者	石川　朝子 (ISHIKAWA Tomoko) (60759877)	下関市立大学・都市みらい創造戦略機構・特任教員 (25501)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関